

青梅市文化財ニュース

第 6 7 号

平成 5 年 5 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

「カッコウ」の鳴く声

毎年、5月中旬頃になると、青梅市東部の平坦地（新町・藤橋・今井地区周辺）には、「カッコウ」が姿を見せます。カッコウは鳴き声に特徴がありますし、電柱やTVアンテナなどよく目立つところに止まりますので、目にする機会の多い鳥です。漢字で書くと「郭公」。「閑古鳥」ということもあります。

カッコウはホトトギス科の鳥で、この仲間は世界で約 130 種が知られています。日本ではそのうち 6 種が記録され、青梅市内では、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、ジュウイチの 4 種を見ることができます。この 4 種は各々鳴き声に特徴がありますので、声だけで簡単に区別がつけます。そして、4 種とも春になると日本に渡来し、秋になると南の国に帰る夏鳥といわれる鳥達です。カッコウのように鳴き声のよく知られた鳥は、その季節、その場所に最初に姿を見せた日（初認日）の記録をとり易い鳥です。ちなみに、青梅市新町地区での過去 4 年間の初認日を調べてみると、89 年：5 月 12 日、90 年：5 月 19 日、91 年：5 月 17 日、92 年：5 月 17 日、と毎年 5 月中旬に姿を見せていることが解ります。他地域の人の話を聞くと、青梅より東の地区での初認日は青梅より早いので、カッコウは東から移動してきているようです。

青梅市内でカッコウがよく見られるのは、東部の平坦な地域で、あまり深い山の中では見られません。これは、カッコウの産卵習性と関係がありそうです。カッコウの仲間には、他の鳥の巣に卵を産み込み、その鳥（仮親）に卵を抱かせ、ヒナを育てさせる「托卵」という習性が知られています。これはよく知られている習性なのですが実は、托卵を行うのは、カッコウの仲間全体の 40% で、他は自分で卵を抱き、ヒナを育てています。何故、托卵が行われるようになったのかは、よくわかりません。青梅にいる 4 種のカッコウの仲間はすべて托卵性です。カッコウの托卵相手は、主にホオジロやモズやオオヨシキリの仲間です。青梅市東部の平坦地は、畑や野原の開放地と、平地製の雑木林が入り混じった地域です。このような場所には、ホオジロやモズが多く見られます。だから、それらの鳥に托卵するカッコウも、市内東部の平坦地に多く姿を見せるということになります。

最近、青梅市の東部は都市化が進み、畑や野原が少なくなり、雑木林も切り払われています。数年前までと比べても大分様子が違ってきています。ホオジロやモズが住めない場所になると、当然、カッコウもその場所から姿を消してゆくことが想像されます。

(文責 桜岡幸治)